

聖書日課 『からし種』 2025.1.5-1.12

<p>1月5日 (日) ヨナ 1章</p>	<p>『さあ、大いなる都ニネベに行ってこれに呼びかけよ。彼らの悪はわたしの前に届いている。』しかしヨナは主から逃れようとして出発し、タルシシュに向かった(2・3節)。アッシリアの首都ニネベへの預言を主に託されたヨナ。しかし、彼は異邦の民への預言を拒み、逃げ出した。主のみ心ではなく、自分の思いを優先するヨナは誰の心にも住むのではないか。</p>
<p>6日 (月) ヨナ 2章</p>	<p>「息絶えようとするとき／わたしは主の御名を唱えた。わたしの祈りがあなたに届き／聖なる神殿に達した(8節)。死に直面した時に、やっとわたしたちの祈りは主の耳に達する必死なものとなるのだろうか。しかし、ゲッセマネで「死ぬばかりに悲しい」と祈られたイエスの祈りは、ご自分の命ではなく、主の御計画の成就。わたしたちの救いを求めてくださっていた。</p>
<p>7日 (火) ヨナ 3章</p>	<p>『あと四十日すれば、ニネベの都は滅びる。』すると、ニネベの人々は神を信じ、断食を呼びかけ、身分の高い者も低い者も身に粗布をまとった(4・5節)。異邦の民であるニネベの人々が、ヨナの叫びに耳を傾け、神を信じて、断食し、粗布をまとって悪の道を離れ、神が怒りを静めてくださることを願った。その悔い改めを良しとしてくださるのが主なる神のみ心。</p>
<p>8日 (水) ヨナ 4章</p>	<p>「ヨナにとって、このことは大いに不満であり、彼は怒った。彼は、主に訴えた(1・2節)。悔い改めたニネベの人々に災いを下すことをやめられた主に対するヨナのこの怒りはどこから起こるものなのだろうか。主の憐れみと慈しみを信頼する者ならば、救われたニネベの人々を喜ぶはずではないか。戦いが世界から消えない原因はわたしたちの心の中に潜むのか？</p>

聖書日課 『からし種』 2025.1.5-1.12

<p>9日 (木)</p> <p>ミカ 1章</p>	<p>「ユダの王ヨタム、アハズ、ヒゼキヤの時代に、モレシエトの人ミカに臨んだ主の言葉。それは、彼がサマリアとエルサレムについて幻に見たものである」(1節)。北と南に分かれ、争いの絶えなかったイスラエル。けれども、主は、彼らに等しく裁きを下し、立ち返ることを望まれ、恵みと祝福を与えようと、預言者を遣わし、呼びかけ続けてくださる方。</p>
<p>10日 (金)</p> <p>ミカ 2章</p>	<p>「ヤコブよ、わたしはお前たちすべてを集め／イスラエルの残りの者を呼び寄せる。わたしは彼らを羊のように囲いの中に／群れのように、牧場に導いてひとつにする。彼らは人々と共にざわめく」(12節)。主の掟から離れて、富める者がますます策を弄して虐げを行っても、主は貧しい者も富める者も「すべて」を集めるとの慈しみを示してくださる。</p>
<p>11日 (土)</p> <p>ミカ 3章</p>	<p>「頭(かしら)たちは賄賂を取って裁判をし、祭司たちは代価を取って教え…。それゆえ、お前たちのゆえに／シオンは耕されて畑となり／エルサレムは石塚に変わり／神殿の山は木の生い茂る聖なる高台となる」(11・12節)。神殿は仕える祭司たちの行いによって姿を変えると主が語られる。万人祭司たるバプテストはそれぞれが教会を建て上げる一人である。</p>
<p>12日 (日)</p> <p>ミカ 4章</p>	<p>「多くの国々が来て言う。『主の山に登り、ヤコブの神の家に 行こう。主はわたしたちに道を示される。わたしたちはその道 を歩もう』と」(2節)。わたしたちは、自分が歩むべき「道」が 見えているだろうか。その「道」を歩むための確かな「羅針盤」 を持ちえているだろうか。「わたしは道であり、真理であり、命 である」(ヨハネ 14:6)と語られた主に聴く信仰を求めて。</p>